大阪府支援教育研究会会報　　2012年10月号

大支援研ニュース

特別支援教育

平成24年10月10日発行
大阪府支援教育研究会
会長　　服部　至栄
（東大阪市立弥刀東小学校

ホームページでお知らせがある場合があります

http://daishienken.visithp.com/

ニュースや本会活動への問い合わせ・ご意見は、Mailにて件名に「大支援研問合せ」など「大支援研」を入れてください。

jimukyoku2009@daishienken.visithp.com

アドレスをテキストで載せるとスパムメールが多数届いてしまうので、画像で張り付けてあります。

◇本年度の役員総会の予定　役員の方はご予定願います。

第3回　日　時　：　平成25年1月17日（木）　午後3時～5時　：　アウィーナ大阪　3階　生駒の間

大支援研　創立６０周年記念研究大会報告

全体会（花熊曉氏）報告　各分科会報告を添付します。

ホームページにはアンケートのまとめもアップしております。

平成２４年８月８日（水）　大阪国際交流センター

大会テーマ　「 大阪の障がいのある子どもの今後の教育について」

－　一人ひとりのニーズに合わせた教育を　－

日時　平成24年8月8日（水）　午前9時30分～午後4時30分　会場　大阪国際交流センター

施設見学研修会報告

日時　平成２４年８月２１日（火）　見学先「（株）関西インフライトケイタリング」

報告記事を添付します。　会社の概要とＱ＆Ａ、アンケートをまとめました。

冬季研修会一次案内を添付します。　二次案内は 11 月下旬

日時 平成25年（2013年）1月26 日（土）　決まりました分については順次 HP に情報をアップします。

午前10時30分～午後4時30分　場 所 大阪国際交流センター

中河内支部　詳細記事はホームページにアップしてあります。

東大阪市支援教育研究会 林間学校の報告

６月１８日（月）から２８日（木）にかけて、東大阪市内の小中学校の子どもたちが５つのグループに分かれて、生駒山麓公園ふれあいセンターで、一泊二日の林間学校を楽しみました。

中河内支部 指導技術研修会の報告

「作って遊べる おもちゃ作り」～時間をかけずにある物で作れるテクニック～

講師：東大阪市立上小阪小学校　教諭 大西 正勝先生（支援学級担任）

日時：平成２４年８月２０日（月）　盛況のうち、終了しました。

他団体　関西国際大学子育て支援センター主催研修講座　案内添付

「自閉症の新しいアセスメント法と発達障害児の地域支援」

平成24年11月24日（土）13時―17時　関西国際大学　3階　301KUIS ホール

平成２４年　９月１３日

各　学　校　長　様
支援教育関係者　様

大阪府支援教育研究会
会　長　服　部　至　栄
（東大阪市立弥刀東小学校）

冬季研修会のご案内　（一次案内）

大阪府支援教育研究会主催で、以下の要項で冬季研修会を実施いたします。
現在、講座の内容・講師等についての検討をすすめております。
詳しい内容および申し込み方法については、後日、二次案内でお知らせいたします。
ふるってご参加ください。

記

(1)　日　時　　平成２５年（２０１３年）　１月２６日（土）
午前１０時３０分～午後４時　（１０時１０分　受付開始）
午前の講座（１０時３０分～１２時３０分）
午後の講座（午後２時～４時）

(2)　場　所　　大阪国際交流センター
大阪市天王寺区上本町８－２－６　　℡　(06)6772-6729

(3)　内　容　　午前・午後　それぞれ　いくつかのテーマ別講座を実施いたします。
詳しい内容は二次案内でお知らせします。

(4)　詳細および申し込み方法
後日、二次案内でお知らせいたします。（１１月下旬を予定しています）
大支援研のＨＰおよびニュースをご参照ください。
http://daishienken.visithp.com/

(5)　問い合わせ先　　大阪府支援教育研究会　書記（研修部担当）　佐藤正幸
摂津市立第四中学校　　TEL　０６－６３４９－６１８１
FAX　０６－６３４９－６１８４

全体会　記念講演「障がいのある子どものニーズに寄り添う支援

～支援教育の動向と今後の課題～」

愛媛大学の花熊曉(さとる)教授に上記のテーマで講演していただきました。

まず愛媛のゆるキャラである犬の「みきゃん」が巨大なスクリーンに登場し、大阪府支援教育研究会（以下、大支援研）の創立６０周年をお祝いしてくれました。

講演は３部構成で、第一に、花熊先生のお父様である花熊四郎先生の事績について、大阪府教育委員会の特殊教育専任指導主事から文部省事務官となり、知的障害養護学校の学習指導要領作成にあたり、教科の枠組みで構成されつつも「一部もしくは全部を」合わせることができるよう現場の「領域論」の思いを盛り込むために粉骨砕身されたことや、ご自身の支援教育との関わりについてお話していただきました。

第二は、支援教育の観点に立ったユニバーサルデザインの授業づくりや個の違いを認め合い、尊重しあう学級集団づくりのポイントについて具体的に教えていただきました。①教室環境の整備　②肯定的で多面的に見る教師の子どもへの接し方　③学習や行動のルールの明示　④子どもが学習内容や授業の過程に見通しをもてるわかりやすい指示・説明　⑤一人ひとりの学習プロセスや学び方を尊重　⑥自尊感情・自己肯定感のもてる授業　など…。

第三は、「発達障がい」の青年・成人に見られる困難や課題から、概念的スキルに加えて子どもの将来に必要となる力として社会的および実用的スキルを身に付けさせること、自尊感情・自己肯定感を育てること、キャリア教育の意義と長期的な観点に立った支援・取組みの必要性についてお話されました。

そして最後に、先進的に取り組んできた大阪府の支援教育の視点はインクルーシブ教育そのものであり、今後も全国に発信していくことを期待されつつ、「大支援研」にエールを送ってくださいました。

花熊先生は２時間近く立ったまま熱い思いを語られ、支援教育に幅があっても参加者の多くの人が感銘を受け、学ばせていただいた講演でした。

全体会に参加された方のアンケートから（感想など　おもなご意見）

小学校

・支援教育の課題の中で「学級と授業の在り方の見直し」について、特別支援コーディネーターとして、通常学級の担任の先生方に、分かりやすく納得してもらい、学校全体として取り組んでいかなければならないと思いました。特別支援教育は、支援担だけが取り組むことではなく、一人ひとりの違いを互いに認め合い、尊重しあえる学級集団作りが必要という認識・意識を高めていくことが、これからの課題であると思いました。

・支援学級の子どもたちに対して、支援すること、その手立てなどばかり考えてきましたが、その子どもたちも他者のために何かをする経験、それによって自信がつき、自尊感情が高まり、いい循環になっていく、当たり前のことですが気づかずにいました。支援計画をまた見直してみます。

・特にキャリア教育の視点で「言葉遣い」や「身だしなみ」、適応行動を考えたスライドの新しい発見がありました。「障がいのある子どもが周りの人のために何ができるか」ということに目を向け、存在価値を見出すことを常に頭の中においておきたいです。

・最後のスライドが大阪の取り組みが目指してきたものと考えます。４つの領域がつながっていることがそれぞれの領域で中心的に取り組んできた人々が意識し、理解し、支援教育の視点でつながることが大阪のこれからの取り組みと考えます。行政（府教委、市教委）もそのことに向けて舵取りをしていただけるとありがたいです。小中高の取り組みに加えて、就学前や乳幼児健診からの家庭支援や親支援を一層充実させることが重要と考えます。家庭での子どもの役割、子どもの仕事を親と一緒に考え、実践できたら素晴らしい。
・日頃まとまりのない考えがすっきりとした講演でした。勤務する小学校では、支援学級２クラスとは別に、不登校児童を中心に集う生徒指導ルームがある。少人数だが、支援学級の児童より大きな課題を抱え、一人ひとりの今後に心労をそそいでいる。学力が低いが、支援学級への入級は拒否、学習はできるが気ままな登校で教師を翻弄している、掃除は嫌・暑いから嫌など理由をつけ帰宅したがる、基本的なことができていない状態。小学校で、基本的な生活の充実を得るために、親や他機関との連携の必要性と一貫性の重要性を感じた。
・小学校のうちからキャリア教育が大切なことがよく分かりました。保護者・教師は、つい目先のこと(学習がおくれないようにすること)ばかりに目がいきがちですが、将来、社会で生きていくために大事なこと、「当たり前のことを当たり前にしていける力」を身につける必要性を痛感しました。他にも他者のために役立つ体験、多面的な見方をする、身だしなみの意義など、大事な視点に気づかせていただきました。
・小学校では学習（読み書きなど）課題をすすめていく部分が多いなと思っています。（保護者の要望もあります）しかし、今日のお話で改めてソーシャルスキルの大切さを感じました。支援の必要な子も必要でない子も社会で生きていくためのルール、マナーをきちんと教えていかなくてはと思いました。
・キャリア教育と支援教育のお話はその通りだと思いました。学校を中心に考えてしまうので、その子が問題なく学校生活を送ればいいと考えてしまいがちですが、よく考えると学校を卒業してからの方が人生において長い時間ですよね。教育の目的が人生の質の向上であるという言葉が印象に残っています。現在関わっている子の中にあいさつ、返事などが難しい子がいます。その子が少しでも社会的行動ができていくように一緒に頑張りたいと思いました。
・「あたりまえ」を疑ってみるという言葉が大変心に残っています。毎日の生活の中で、子どもたちに「これが当たり前」と深く考えもせず話したり、提供してきたりしたことがたくさんあるのではないだろうか・・、と思っております。そして、できないからやらない！にならないよう、「したくなくても、しなくてはいけないことは、やらなければならないこと」を子どもたちに納得がいくように具体的にどのような支援や言葉が必要なのかを考えさせられるばかりです。
・分かりやすい話し方、内容でした。今まで自分なりにいろいろ考え、工夫し行ってきて一応の達成感を持ち、意欲も持ち続けています。今日のお話で、もう１ランク、２ランク上げた支援、きめ細かな支援をしなさい！と背中を押されている気持ちになりました。話を聞きながら今後すべきことが浮かんできました。
・自閉症教育の「構造化」のところで、「構造化」することが目的でなく、その中で何をどのように学ぶかが大切だということが印象的でした。自分自身も当たり前だと思って深く考えていなかったので、新しい感覚でした。今後、「あたりまえ」を疑ってみたいと思います。
・今回は支援教育を考える上で根源的な視点を学ばせていただきました。最初の話では、先生の立ち位置というか支援教育に携わられている根っこの部分を教えていただけ、その後での先生のお話にこれまでより熱意や思いをより感じることができました。また、医学的モデルとしての機械的な支援でなく、ニーズスペックとしての子どもの困り感やニーズからスタートする支援教育の考え方は子どもの現実からスタートすることを大切にする大阪の教育の流れにまさに合致するものだと思いました。
・小学校だけでなく、幼保から小中高での様々な実践についてわかりやすくお話していただき大変勉強になりました。そして、学校生活だけでなく、将来就労や社会人として生きていくことまでも見据えた話を聞けたことがすごく良かったです。日頃、つい目の前の細かいことにとらわれ、支援、指導し

ている自分ですが、どのように生きていく力をつけるかを考えた上での支援が必要と思いました。「キャリア教育で最も大切なのは小学部である」という言葉が心に残りました。そして支援教育の視点がすべての児童生徒のためのものであるということが、胸の中にストンと落ちた気がしました。

・先生のお話を聞いて、もう一歩踏み込んで先を見て支援を考えていかなければと思いました。今まで、本当に困っていることに添って何ができるかという視点ばかりで見ていたような気がします。そうではなく、「この子は周りの人のために何ができるのか」という考え方に、頭を打ったような気がします。結局、自己肯定感や自尊感情の先には“存在価値”があって、それは集団の中でしか育てられないものもあると思うと、やはり、クラス集団の環境としての重要さを改めて感じました。

中学校

・自分の問題意識ととてもマッチした話でした。授業の中で多面的な見方を教師が出来ているのか、できないことや、まちがうことが大切にされ「なぜできなかったんだろう。」「なぜまちがったんだろう。」と逆にまちがいが授業の深まりにつながるようにやっていきたいと思うのですが・・。しかし、現場は、時間は足りないし、教える、覚えさせなくてはいけない内容が多すぎです。子どもたち一人ひとりの表現さえ保障している時間がないのが現実な感じがしています。学び方が分かれば量は関係ないといいたいところですが、「教科主義」は相変わらず強いのです。教科と領域のバランスは教師一人ひとりの責任でやるわけですが…。

・大変わかりやすく自身の授業の参考になった。内容が盛りだくさんだったが、発達障がいの子どもたちが、成人になると「生きにくさ」に直面していくんですね。日本社会がもっと懐の深い社会になることを願います。今は何か違うと排除されてしまう、自分のことで精いっぱいの社会のように思えます。発達障がいの人たちは理解とちょっとした支援で働ける場がたくさんあるのにとても残念な気がします。

・多方面の話が聞けて参考になりました。キャリア教育、社会に出てからのことを踏まえた教育の大切さを痛感いたしました。現在、支援学級担任ですが、通常学級ではおとなしくて座っている生徒も支援学級では、甘えも出て行動が派手になり、叱る場面もあります。対応の難しさを感じます。日々勉強の毎日ですが、長いスパンでの教育を目指していかないといけないと思いました。

・父子二代の支援教育の足跡を見させてもらいました。幼くして亡くなられたお父さんへの思いがお話をより印象深くしました。中でも、キャリア教育のお話は、共感しこれから追求していきます。ありがたいことに２５歳くらいになった教え子と今も付き合い、就職についてリアルな話を教えてもらいます。その経験は現在の中学生にフィードバックできます。要はコミュニケーション力です。

・キャリア教育が学校活動の全ての場面で意識されるべきだと思いつつも、何となくあいまいな毎日を過ごしていました。授業中や学校生活における言葉づかいでパブリック、プライベートを意識させるということは、意図的に自分自身も取り組もうと思いました。今、不登校生徒と活動していますが、将来を見通し、今を生活するため、基礎体力、基本的生活習慣、身だしなみ、あいさつ、家庭での役割、働くことの意味など保護者と連携を取りながら今後取り組んでいきたいと思います。

・中学校にもなると、保護者からは「本人の自立に向けて」ということばがよく出てきます。進路を考える時期ということもあり、中学校になってようやく本人の将来をしっかり考える時期を迎えているような感じです。今日キャリア教育の話にもありましたが、中学校になってから「こうしよう」「こうなってもらいたい」と思っていては遅いということを痛感しました。しかし、中学校の３年間でもつけてあげられる力はたくさんあると思うので、できるだけたくさんの力をつけて卒業していってもらいたいと思います。

支援学校

・支援教育の観点に立った教育の大切さを教えていただき、また学校に戻って頑張ろうと思いました。いつか通常学級へ行った時も今の経験がユニバーサルな授業をするのに必ず役立つと信じて努力しよ

うと強く思いました。みきゃんがかわいかったです！

・学問的理論に基づいた実践紹介が数多くあったと考えていました。キャリア教育の充実も小からの重要性を知るために「やらねばならないことは、やらねばならない時にやらねばならない」保護者の「したくないことをこの子にさせないでください」という言葉だけに任せてはならないという事例などが印象的でした。授業づくり、集団作りの重要性。特に自尊感情や自己肯定感を育てるために授業とのコラボが必ず不可欠ということがよくわかりました。長期的な観点に立った視点こそこれからの重要な実践だと信じるご講演でした。

その他

・担任時代を振り返りながら、クラス経営などしていた頃を思い出しました。子どもたちの自立に向けての支援がとても大切であること。気づき等個性として学級でお互いを認めあえるクラスを目標に常にクラス目標を「〇〇（私の名前）ファミリー」として絆深く関わったこと、支援学校に進学した子も高校に進学した子と対等に接していたことなど・・・なつかしかったことでした。今、教育委員会におり、直接関わることはできませんが、巡回相談等で学校を支援する立場でよりプラスに励みたいと思いました。

・自立に向けての青年期の子どもを持つ母親です。身辺自立・社会性の獲得などは本当に大切だと痛感しています。自分では、その時その時で精一杯やってきたつもりですが、学びにくい子どもたちなので、限られた条件の中ではなかなか身につかないのが現実です。各々のサイクルで、しっかり親をサポートしていける専門家・専門機関が少ないです。（すぐ相談したいのに待機させられることが多い）親が悩みをすぐ相談できる、相談できるだけでなく、適切で見通しを持って指導できる人・機関が各々の地域で必要だと感じます。

・今まで発達障がいの子どもの支援についての講演を聞くと必ず、その子の「個性」として受け止めて！というメッセージが大きく発信されていることに、プレッシャーを感じてきていました。個性として、その子の理解ができれば話は早いのですが、学校は普段から様々な問題が起き、発達障がいのある生徒以外にも手がかかるので、今日の花熊先生のお話はそんな現場の状況をふまえた上での具体的なアドバイスで、ほっとする思いです。特に、お礼やあいさつができるといったコミュニケーション上の基本的な要を押さえること、基本的な生活リズムを整えること、授業中の言葉づかいの注意などが、社会的スキルの向上につながることを信じていこうと強く感じました。

・聴いていて納得できることばかりでした。「構造化」は何も特別な事ではない、常日頃私たちの生活の中、どこにでも見られることだと私も訴えています。周りの世界をわかりやすくすることは、全ての子ども達にとっても必要な事だと思うのです。ただ先生がおっしゃったように衝立やカードを使う事が構造化であると思われるのは残念です。まず環境を整え、混乱しやすい彼らがコミュニケーションを取ろうと思える相手が自分のつらさ、しんどさをわかってくれるという共感からまず始まるのではないかと思っています。自己肯定感、自己達成感をいかに学校生活の中で得ていくか、これによって大人への道がかわっていくのだと私も痛感しています。

・特別支援教育士として花熊先生の話をお聞きするのが楽しみです。より詳しくまとめられたハンドアウトがとっても役に立ちます。就労についての話がとっても興味があります。

・昔々、研修会に参加した時によく先輩方から「花熊先生、花熊先生」とお話しされる声を聞いておりました。珍しいお名前なので身内の方だろうとは思っておりましたが、ご子息だったのですね。お若くして亡くなられたのにあれだけの名声、ご努力ご検討が如何ばかりだったかと拝察いたしました。今日のご講演で保護者が「厭がることはさせないで！」と陥る誤りは、支援者が如何に“厭がる”ことを軽減するかを保護者とともに考えることですね。当たり前のこととして身につけられるようにするために！禁止の多い現場“感謝、ねぎらい”が多くなる現場になりたいものですね。

大阪府支援教育研究会　創立６０周年記念研究大会

2012 年８月８日　大阪国際交流センター

分科会　まとめ・報告

第１分科会　高等学校におけるともに学び、ともに育つ教育の実践

澁谷花菜子氏　（大阪府立西成高等学校）
大原有則氏（大阪府立枚岡樟風高等学校）
中川泰輔氏　（大阪府立松原高等学校）

澁谷花菜子氏からは、西成高等学校での障がいのある生徒について次のようなお話をしていただきました。2006 年度からは知的障がい自立支援コースが設置されているが、創立以来ほぼ毎年障がいのある生徒が入学しているため、クラス担任を中心とした全教職員で関わる体制がある。情報交換の会議を緊密に行うことによって、情報を共有している。毎年４月末頃に、なかま紹介ホームルームを行い、障がいのある生徒の自己紹介を冊子にして配布し、高校に通う全ての生徒が、障がいのある生徒について知る取り組みも行っている。

大原有則氏からは、共生推進教室の紹介や自立支援コースとの違いなどのお話をしていただきました。共生推進教室では、クラスやクラブ・たまがわ高等支援学校等での仲間作りを大切にしている。周りの生徒と共同作業をする場を設定したり、一番の理解者を発見し、そこからの広がりなどを支援している。卒業後の就労を目指しているので挨拶や言葉遣いに気を付けさせることや、職場実習やクラブ・発表の機会を多く経験することにより、本人が成長することが多いという話もしていただきました。

中川泰輔氏からは、昨年度に担任をしたＡさんに対しての支援の体験を基にお話をしていただきました。年度当初Ａさんは、「集団の中にいることが苦痛・何故だか学校に行きたくない」と訴えていた。課題は自己肯定感・人間関係の弱さであった。学校では担任を中心に色々な人が情報を共有しながら支援した。産業カウンセラーとも連携して支援した。そのような取り組みを通じて、自己肯定感や自己認知が高まり、「学校に来られる・学校行事に参加する」ことができるようになった。

３名の先生方の話で共通していたことは、色々な人が共通認識をもって支援をされていること・一人ひとりのニーズに合わせた教育を実践されていたことでした。参加者からは、入試や実際の生活についてなどの質問がでました。

第２分科会　関係機関との連携　実践報告　他機関と連携して自閉症スペクトラム障がいのある子どもたちの支援にあたった実践について

大澤佳世子氏　（大阪自閉症支援センター）
佐藤美恵氏　（高槻市教育委員会　教育指導課）
稲岡美香子氏、山中洋子氏（高槻市立第九中学校）

支援学級担任として、専門的な知識の足りなさや効果的な指導技術について悩むことがよくあります。特に初めて支援学級を担任した場合には、それが顕著にあらわれることがあります。

今回の実践報告では、自閉的傾向のある生徒への対応に外部の専門機関との連携を行いながら取り組み、専門的な知識のある教員の育成に取り組んでこられたペアサポート事業についてお話して頂きました。

教師は、ともすれば自分たちだけで解決しようとしがちですが、今回の報告では、外部の専門機関との連携、市内の教員のアドバイスを活かせる制度（リーディングチーム）など、色々な工夫がありました。また、市教委として障がい児教育を担う教員の養成に計画的に取り組まれており、この事業対象の学校を選ぶ場合には、支援学級担任だけでなく学校としての体制も重視されていることや、対象教員は事前書類や経過書類を書くことにより、児童生徒を見る視点や実態把握が確実になるとのことを話されていました。

専門的な知識の獲得、記録の重視、子どもへの寄り添い感等、支援教育に関わる者としての基本が大事にされていることがうかがわれました。

また、今回対象となった生徒の小学校時代の先生も会場におられ、成長した二人のステキな成長を感じましたとの感想を持っておられました。

報告のあといくつかの質問がありました。自閉症の子供が廊下を走ることの理由として、後ろを見ながら走っているというお答えがありましたが、全ての行動には理由があります。報告の中でもふれられましたが、氷山モデルで示しますと、外から見える行動に対処することばかりではなく、外から見えにくい「個々の自閉症の特性」を理解し、「なぜそのような行動が起きるのか」という視点から対応し支援をすると、子どもが自然に変わっていくのではないでしょうか、とのお答えをいただきました。また、校内での研究体制についても質問があり、支援学級担任だけでなく、通常学級担任も参加する等、全校的な取り組みをされていることが分かりました。

保護者は、子どもの成長をみてこられています。障がいだけでなく、その子のいいところ、しんどいところ等、私たち教員よりもよく知っておられます。そんな中で、保護者の信頼を得、子どもたちの成長のための支援を行うためには、正しい知識と子どもたちの将来に向けての見通しをもつ必要があります。今回の実践報告は、そんな私たちに一つの見通しを持たせてくれる取り組みだったと思います。

第３分科会　発達障がいのある子ども理解と具体的支援

○発達障がいのある子ども理解と具体的支援　　平野眞美氏（大阪府立守口支援学校）

発達障がい理解のために、特徴を具体的な例と共に説明していただきました。その上で、「環境づくり」「授業づくり」「学級づくり」の三つの支援のポイントにそって、多くの学校学級の実践を踏まえ紹介していただきました。担任が、その子とどう接するかを周りの子どもたちが手本にしながら成長していくことを念頭に置き、子どもをほめて認めて好きになって受け入れることで、すべての子どもを輝かせることができるという言葉が印象的でした。

○発達障がいのある子ども理解と具体的支援　～障がい理解をベースに「その子」理解を！～

浜崎 仁子氏（和泉市立光明台南小学校）、保護者の方々

障がい理解をベースにした『その子理解』をキーワードに、その子にあった方法を見つけ支援するヒントを保護者の方々のかかわりも含めて紹介していただきました。三人のお母さん方のお話からは、それぞれのご家庭の「その子理解」をもとにした日常の支援のようすと愛情がとてもよく伝わり心が温まりました。保護者の方の情報を元にして、教師が支援教育のプロとして支援の方法をいっしょに考えながらアドバイスしていくことの大切さがとてもよく理解できました。立場や役割をこえた「つながり」が、一人ひとりが豊かになる将来へのキーワードであるという浜崎先生の言葉が印象的でした。

〇和泉市立富秋中学校の取組み　支援教育の視点からの生徒指導と学習環境作り

原田 尚史氏、玉野 良和氏（和泉市立富秋中学校）

長年「荒れ」を克服するために、さまざまな方法を駆使し努力してきた中学校が、課題を持つ子どものことを「困っている子」という支援教育の視点を持って見つめ直し、関わりを持つことで学校を変えていく取り組みを行っているという報告をしてくださいました。授業のスタイルから学級や校内の環境づくりまで、ユニバーサルデザインの学校づくりを、支援教育部会を中心に組織的に行うことで、効果がでてきているそうです。チェックリストから得た情報をもとに、生徒それぞれにあったアプローチの方法について、近隣の学校や施設と協力して検討していくことで、誰にとっても安心できる学校づくりがこれからも続けられていくことだと思います。

第４分科会　「個別の教育支援計画」の作成と活用

林　茂樹氏（大阪府立佐野工科高等学校定時制課程）

藤野洋子氏、丹羽はるか氏（大阪府立交野支援学校）

林氏からは、佐野工科高校定時制課程の入学生の特徴と教育支援計画の作成を通じて、教育的に不利な条件におかれた子どもたちを支えていく力のある学校・インクルーシブな学校にしていこうとする取り組みが進められていること、年１回に終わらせない中高の連携や、多面的に子どもをとらえるために、関係機関との日常的な対話を大事にしていること、卒業後、社会に出て行くことを前提にした自立を目標に「支援計画」を活用しようとしていることが報告されました。

藤野氏・丹羽氏からは、①わかりやすく説明する力をつけよう　②保護者の気づきを促す「事前説明」の工夫　③ケース会議の工夫という構成で、ワークを交えながら報告が行われました。「個別の教育支援計画」や「個別の指導計画」の作成に個々の教師がウンウン唸りながら追われるのでなく、ケース会議を工夫することで、もっと活用がはかられる「個別の教育支援計画」「個別の指導計画」の作成をめざす取り組みが発表されました。数多くの地域支援巡回相談の経験の中から生み出された実践で、ホワイトボードとデジカメを活用した「アセスメント」「プランニング」の会議の工夫は、すぐに使えるヒントを多く含んでいました。

２本の報告ともに、より具体性、効果のある「支援計画」「指導計画」作成につながるケース会議の進め方について多くの示唆を含んだ内容でした。

第５分科会　学校におけるＩＣＴの活用

「ＩＣＴを活用した 10 年後の支援教室，支援学校の姿をパネルディスカッションを通して考える」

坂井聡氏　（香川大学教育学部）

小川修史氏　（兵庫教育大学大学院）

竹島久志氏　（仙台高等専門学校）

金森克浩氏（国立特別支援教育総合研究所）

「10 年後の支援教育を想像して」をテーマにした研究発表とパネルディスカッションが行われました。

初めに、　①ＩＣＴを活用した支援の可能性　②ＩＣＴを活用した教員研修　③今後求められる支援機器の　３つのキーワードが提示されました。

坂井氏は、ＩＣＴの活用は新しい能力感の創造（その子の力を最大限に引き出すこと）であり、障がいを克服・改善するのではなく、生活上や学習上の困難さを改善・克服することを再確認するものであり、本人の能力と支援や機器だけに頼るのではなく、周囲の理解を広げていくことがより大切なことであるとお話されていました。

小川氏は、「ＩＣＴ機器を使うことが目的にならない」ようにすることが重要であり、そのためには、子どもの気持ちや立場に立って考え、なぜＩＣＴ機器や支援グッズを使うのかを教員がよく理解することが大切だと説明されていました。また、ＩＣＴ機器を使う柔軟な考え（トライ and エラーand フィッティング）を持つことが望まれると提案されました。

竹島氏からは、子どもの活動を中心に改造した重度・重複障がい児のための教育活動支援機器・ソフトの紹介がありました。また、特別支援学校と連携し教材や機器の開発に取り組んでいる福祉情報教育ネットワークの情報が紹介されました。

最後のパネルディスカッションでは、10 年後は、教員が教育のすべてを担うのではなく、多くのネットワークを広げ、ＩＣＴ機器が活用されているであろう。そのための教員研修（理論・実践・疑似体験・リフレクション）の繰り返しが大切であると話されました。

休憩時間には、ＩＣＴ機器を使った教材の展示があり、熱心に体験される先生方の姿がありました。

また、講演後は、講師の先生に質問される先生方が多く見られ有意義な研修となりました。

第６分科会　特別支援教育におけるキャリア教育

亀平福一氏（大阪府立堺工科高等学校）
永松裕希氏　　（信州大学教育学部）

亀平氏から、知的支援学校におけるキャリア教育の実践をお話しいただき、知的支援学校における職業教育について次のようにお話しいただきました。

キャリア教育とは、児童・生徒の実態に応じて、労働や就職・就労のみにとらわれず、「自分でやれることを増やしていこうとする態度・意欲」を育成する教育ということも含まれる。職業体験を通して本物と出会い、多様な気付きや発見を得させることも重要なことである。わからない時は質問でき、他者と協力できるということも重要な要素である。私たち指導者自身が常に社会背景の変化に対応していくことが必要である。学校と地域・企業が連携し、小・中学校の段階から自らの力で社会で生きていく力を育てることが大切である。

支援学校での実践と工科高校で実践されていることで、キャリア教育を進める上での具体的に重要な教育内容を話していただきました。

永松氏からは、特別支援教育におけるキャリア教育について次のようにお話しいただきました。

学校で出会った子ども達が幸せに過ごしているかどうか気になるところである。５年間の卒業生の就業者の追跡調査によると、離職理由トップは職場の人間関係である。人とどう関わっていくかがポイントとなる。卒業後、子どもにとって何が必要か、社会の中でどう生活するのか、個人の仲間集団への社会的スキル訓練が必要である。さらに、職場や社会が障がい者と共に生活するスタイルができていることが重要である。

質問の一つに、キャリア教育をどう充実させるかというのがありました。日本は、苦手なところで勝負させようとするが、この子にとって豊かな人生とは何か考え、練習ではなく生活を中心として必要としているものをカリキュラムにするという回答をいただきました。

大阪府支援教育研究会　６０周年記念研究大会

参加された方のアンケートから

（各分科会の感想など　おもなご意見）

第１分科会　高等学校におけるともに学び、ともに育つ教育の実践

・中学校卒業後の高校での学習の様子がよくわかった。
・松原高校の中川先生の発表は、テーマ・アプローチ・アセスメントなど学ぶべき点がたくさんありました。小・中・高・支援学校の全てで今日共通する内容だと思います。
・異校種の発表が聞けてよかった。各校の先生方の生徒たちへの思いがよく伝わってきました。
・資料だけではわかりにくい部分についても、それなりに答えていただけた。各校とも、しっかり取り組まれていることや、苦労されていることがよくわかりました。
・今回の発表を聞き、子どもたちの自立に向けて、小学校では何を大切にしていかなければならないかがわかりました。障がいの特性については理解が進んできていますが、長いスパンを考えての教育のあり方を聞かせていただきました。
・枚岡樟風高校の「ウチの生徒」、松原高校の「他の生徒とかわりない」、西成高校の「ほんとにみんな一緒に勉強してるんや」。共生教育の肝だと思います。障がいのある生徒を他の生徒と「分けたがる」教員が多い中、本当に心強いことと感じました。
・枚岡樟風高校の生徒の卒業後の社会に出てからの職場実習が、まるで専門学校のように本格的で、プロを育成するかのような学習風景で、キャリア教育の取り組みがすばらしかったです。
・松原高校の発表では、生徒一人ひとりを大切に接している姿や熱意がよく伝わってきた。
・中学校卒業後の進路指導をする上で、大変参考になりました。自立支援コースや共生推進教室がどのようなものなのかを本日おぼろげながら知ることができました。
・小学校の教員をしているが、子どもたちの進路がとても気になっています。中学校まではイメージがわくが、その先はどうなるのかわからないことだらけでしたが、今日、現場の先生方の声が聞けて、少しずつもやがはれていくようでした。
・支援学校だけでなく、一般の高等学校での障がいのある子どもたちへの取り組みがよくわかりました。気になっていた質問にも、本音を忌憚なく話して下さって安心しました。
・通常の高校への進学が大変増えてきています。しかし、合格するだけでなく、当然、楽しく高校生活を送り就職を希望します。高校での取り組みがよくわかり安心しました。この取り組みがすべての高校に広がりますように。

第２分科会　関係機関との連携　実践報告

- 障がい(自閉性)を持っている生徒が学校に来て、することがある、出来ることがある、すべきことがあるという思いを持つことがすごく大切だと思いました。教科の学力を少しでもつけることも、そのひとつかもしれませんが、別なアプローチ。それは花の水やりでも、そうじでも、手伝いでも、栽培でもいいのですが、そういう有用感の持てる活動を一つ入れることが大切だと思いました。すごくいいアドバイスになりました。
- お二人の先生の熱心な取り組みに感心しました。教材などを積極的に作ったり、色々と試したり、それに対して専門家のアドバイスがうまく生かされていて、本当に連携をうまく利用しているなと思いました。本人の様子が先生達の色々なアイデアや手立てでこれだけ様子が変わるというと、やはり環境やかかわりの大切さがよく分かりました。大澤先生の支援に関するアドバイスもとても的確でやはり、はっきり「これは×」「これはがんばりましょう」と助言していただくこととで、先生の迷いがない支援につながるのかなと思いました。
- 同じ高槻の教員ですが、九中でこれだけ分厚い取り組みがなされているとは知りませんでした。熱意あふれる取り組みを聞かせていただき、ありがとうございました。特に印象的だったのは、お二人の先生の目の前の“この子”を理解したい、自立に向けた支援をしたいと願いながら，課題が多く困られていました。その時に「子どもの困り感」を見抜き、アドバイスされる中で、お二人の先生の“困り感”にも寄り添われている大澤先生の姿に感銘を受けました。大澤先生が、いろいろな子の理解するための鍵をどのようにして見つけ出されるのだろうかと思いました。また、お二人の先生が大澤先生のアドバイスに真摯に向き合い、自分の見方や支援の仕方を柔軟に変容させている姿に、目の前の子どもをなんとかしたいという熱い思いを感じました。今日は多くのことを学ばせて頂き、ありがとうございました。
- 大阪自閉症支援センターの活動にとても興味をもちました。また、センターにペアサポートを依頼した高槻市教委にも感心しました。
- 関係機関との連携の先の子どもの姿が本当によく伝わってくる発表で、この分科会に来てよかったです。
- パワフルな実践のお話に夏休み明けのエネルギーをいただきました。
- 実践報告者２人の発表、そして大澤先生のコメントに目の前の子どもに、まっすぐ向き合っていくことの重要さを再確認。元気が出ました。１人では…ぶつかる壁を乗り越えられなくても、チームとしてやっていくこと、そして適切なアドバイスをもらって、いっしょに考えていくこと、大きな力です。
- 中学校支援担のお二人のお話から、大きなパワーを頂きました。Ｔ君の前でくやし涙を流された稲岡先生の赤裸々なお話、その誠実さに、胸をつかれる思いでした。励まして頂きました。ありがとうございました、

- 私自身、数年前にペアサポートでの御指導をいただき、大変ありがたかったと実感しています。高槻のリーディングチームの先生方のアドバイスは具体的で、日々の指導に取り入れられるように指示いただきました。アクト大阪との連携は自閉の子どもを前に不安をかくせずにいる私を前に、保護者の信頼の基になったこと確信しました。子どもを真ん中に、校内と校外の機関、保護者が手をつなげることは、本当に必要なことですね。まとまらない感想ですみません。Ｉ君Ｔ君の小学校時代をみてきた私には、とてもステキな成長した２人を感じられる報告でした。ありがとうございました。
- 具体的実践の報告がすばらしかったです。自閉症センターのアドバイスを的確にとらえ、そのアドバイスにそって実践された姿勢に感服しました。自分もがんばらねばと思いました。
- ペアサポート事業を受けて取り組まれた中学校の実践がとても具体的で分かりやすかったです。とても熱意あふれるお話でした。ありがとうございました。
- 中学校の実践をもとに、自閉症支援センターとの連携の意義を論理立てて聞けてよかったです。
- 具体的な取り組みを通して、新しい環境に慣れず困っていた子どもたちが落ち着いて自立して活動できていく様子がわかってよかったです。「全て理由ある行動」という言葉が心に残りました。
- ペアサポートというシステムで支援体制が整い、それを実行に移し、行動が安定していった様子がよく分かりました。
- 発表、講演ありがとうございました。高槻九中の２人の生徒への支援、本当に感動しました。特性にそった支援をしっかりされており、とても勉強になりました。学校だけでは、どうしたらよいか分からなくて行き詰まった時、ペアサポートで専門家の方からの、その子の特性に応じた適切なアドバイスを受けられることは、とてもありがたく、頑張って支援していくことができます。

第３分科会　発達障がいのある子ども理解と具体的支援

・具体的に保護者の方や先生が１人の子どもと関わったうえで、こうしたらという支援の方法をアドバイスして頂けたことは、イメージしやすく参考になりました。
・発達障がいのある子どもへの具体的な支援方法などを、分かりやすく教えていただき本当にためになりました。また、実際に保護者の方々のお話を聞くことができて、「その子」の理解を進めることの大切さを学ぶことができました

・様々な校種の先生方に具体的な話を聞かせて頂けて有意義でした。保護者の方の生の声（思い）が聞けて良かったです。
・障がいがある、ないは、関係なく、一人ひとりの子どものニーズに寄り添える関わりが大切だと改めて感じました。
・保護者の方々の発表があるとは思っていなかったので、びっくりしました。保護者の方々に拍手です。
・小学校の先生が保護者の方と一緒になって取り組んでいらっしゃる姿を見せていただき、中学校として同じスタンスで取り組んでいけたらきっとその子どもにとっても、保護者にとってもよりよいものになっていくのかなと受け継ぐ中学校として感じた。
・学校以外の時間帯の過ごし方など、保護者の声を聞くことができてよかった。
・特に浜崎教頭先生のおはなしを興味深く聞かせていただきました。保護者の方々のおはなしをもりこんで下さり、とても参考になりました。また、保護者の方々のおはなしは自分自身の生き方を見直すきっかけにもなりそうです。
・「特別支援教育」について、再度認識を深めることができました。様々な立場からのお話を聞けて、本当に参考になりました。特に保護者の方のお話は、心に深くひびくものがありました。私はそういった保護者の方の思いを、真剣に受け止めてこれていただろうかと、反省する場面もありました
・これまで、保護者の方のお話を公の場で聞いたことがなかったので、とても興味深かったです。悩み、苦労もしながら、前向きに子育てをしてこられた話に、頭が下がります。また別の機会にも、保護者の方の話を聞きたいと思いました
・具体的な支援を聞かせていただき、当校の在籍児を思い浮かべ納得する私でした。でも、一部分だけで「その子」への支援を構築しており、日々の観察、適切な対応が必要だと感じました
・富秋中学校の実践報告について今後の課題がよく分かってきた。学校の乱れや子どもの問題行動の背景に、発達の課題があることが多く、小学校ではかなりそれに向き合って取り組めているが、中学校ではまだまだ生徒指導と支援教育の課題が共になっていない現状があること。富秋中学校は、まさに、その２つの課題を融合させて、学校全体の取り組みにされて、大変勉強になった。チームで前向きに取り組まれているところに好感を持てた。チームワークの大切さを再認識できた。
・（３つめの発表で）支援教育の視点からの生徒指導というお話がとても興味を持って聞けました。チームとして取り組んでいくことの大切さがよくわかりました。
・富秋中の状況とよく似た環境の小学校に勤めたことがあり、「荒れ」と取り組みました。「環境を整える」「一人ひとりをていねいに理解する」「成功感を持たせる」「肯定的に」というキーワードは、その取り組みと同じだなあと思いました。
・富秋中学校の実践を聞き、校内全体で共通理解のもと取り組まれていることが、素晴らしいなと思いました。全職員の共通理解の難しさを感じています。

・３つ目の報告で、荒れていた学校が、職員一致してユニバーサルデザインの授業を取り入れ、学校が落ち着いてきたということはとても参考になりました。
・保護者３人の方と先生が連携して、豊かに楽しく取り組まれていたのが素敵でした。
・つながっていくことの大切さを改めて思いました。「つながり」を作っていくのは大変ですが、やっていく必要を強く思いました。
・中学校の事例は少ないので、もっとお聞きしたいです。保護者の方の話はとても良かったです。苦労されていることなども聞ければ、参考になります。
・中学校の内容は小学校につながるものがあり、先生方の謙虚な姿勢に感動しました。
・家と学校以外の場所に行くことなどについて、教職員と保護者のつながりや連携、情報の共有をどの程度、どのようにしていくことが有効なのか少し気になった。
・障がい理解をベースに「その子」理解を進めていらっしゃる現状がよくわかりました。自分の子だけを見る目からまわりとの係わりを見つめて、変わっていったのがよくわかりました。
・一本目　早野さんの報告・・・多くの経験に基づき、大変わかりやすかった。
　二本目　三人の保護者の方の体験が生で聞けて良かった。
　三本目　富秋中の報告は、モデルルームやユニバーサルデザインの授業づくりなど、様々な具体のどの子どもにも取り組める内容で、よかったと思います。
・今現在、小学校の支援学級担任をしており、関わっている児童のほとんどが発達障害の子どもたちです。今日の分科会での講演を聞いて、自分は今まで支援できていたと思っていたけれど、子どもや親の身になって支援できていなかったと反省しました。児童一人ひとりに沿った支援ができるよう、今日の講演で学んだことを活かしていきます。
・学校内体制とそれぞれの先生方とのつながりがききたかったです。
・どんな児童がどんな成長をしているのか知れてよかった。同じ障がいだからといって、同じ症状だと判断するのではなく、あくまで知識として持っておくのがよいと感じた。
・保護者の方の「視野の広がり」「いろんな人とのつながり」を聞いて、支援担を振り返り、いろんな子に出会えて、その事で知った事、感じた事が沢山ありました。子どもは保護者だけでなく、教師にもいろんな事を広げてくれると思いました。
・困った生徒→困っている生徒　　教師の見方（教師中心）でなく、生徒の立場（生徒中心）を基本に考え、実行していかないといけませんね。
・保護者と保護者、保護者と教師がつながることの大切さ、つながることからわかることが沢山あることを知りました。
・印象に残ったことは、「できないことを注意するのではなく、できることを認める。」ということと「障がい理解とその子理解」という事でした。支援学級担任として、この視点を大切にしたいと思いました。
・障がい者理解を通して、学級・学校全体の指導につながることの大切さを知らされました。何よりも「歩み寄る能力があるのはどちらか？」という言葉は印象に残りました。

・ユニバーサルデザインについて、具体例を多く示してくれました。私の学校でも取り入れて参りたい。
・具体的な板書や写真を入れたパワーポイントがとても分かりやすかったです。資料として冊子でいただけるのも、今後活用できるのでありがたいです。
・発達障がいという概念は最近よく聞きますが、今日の講演を聴いて、改めて、個に応じた取り組みが大切だと思いました。９月からの子どもたちとの日々に向けて、「こんなこともやろう」「やっぱりあれもやろう」と背中を押され、また、こんなこともできるのだなとやる気をいただきました。ありがとうございました。
・チーム支援という言葉、幼小中連携という言葉がたくさんでてきますが、もう少し掘り下げて内容をお聞きしたかったです。チェックリストを用いて、どのような効果が合ったのか、課題は何か？
・授業、教室の環境の改善は支援学級の生徒だけでなく、通常クラスの生徒も集中力や心の安定につながるんですね。もっと意識して環境づくりをしたいと思います。
・うまくいくことばかりでなく、うまくいかなかったこと（二次障がいなど）も含めて交流できたらよかった。
・支援学級ではできても、通常学級では定着しない様々な教室環境･･･コーディネーターとしてしっかり伝えていく必要があるとずっと思いながらなので、改めて考えていかなければと思い直しました。「なんだか楽しいなあ～」と思える手だてを考えているという、保護者の方の言葉に大きくうなずけました。
・スローモーションで動く練習をまた学校でもやってみたいと思います。早野先生はまだまだ、引き出しがありそうなので、今度はもっと一部分をほりさげた具体的なお話も聞きたいです。浜崎先生はとても落ちついた声で、なんだかその声を聞いているだけでも関わってもらった子ども達は幸せだったんだろうなと感じました。保護者の話で「この子がいてよかった」という言葉を聞けると、自分が関わったわけではなくてもうれしく感じます。「その子理解を深める」大切なことだと思います。中学校の大変な努力と苦労のお話を聞かせていただき、身にしみる思いで聞いておりました。アスペルガーが中学校になってから発覚したというのは、小学校の責任を感じます。早めに気づき、早めにアプローチしてあげるのが大切だと改めて感じます。中学校がよくなっていっているということで、先生方の力に頭が下がる思いです。
・前向きな親の生き方、それは我が子 only ではなく、他者との関わりから客観的に見れ、認める気持ちに変わっていくことがお話を聞き理解できました。中学校の実践、心がほっこりしました。ピンチはチャンスにしていかないといけないですね。

第４分科会　「個別の教育支援計画」の作成と活用

・すごく参考になりました。自分の教え子が高校受験をひかえて、相談の電話があったりなどうまく答えてあげられずにいます。現在の職場で、まず職員間の共通理解がなかなかできずに困っています。保護者の方だけでなく、職員にも話を進めたいです。
・内容は、興味深くなるほどと思わせられるものばかりでした。でも、この実践を全員となると…　具体的に個別の教育支援計画、教育指導計画の例が見られると期待していたのですが、それが見られなくて残念でした。
・ケース会議の充実という話はよく分かりましたが…　２０数名の会議をどうやって？と思いました。正直な感想です。
・個別の教育支援計画のことを改めて考えさせられることばかりでよかったです。
・具体的な内容の講演、ビデオもあり、とても参考になりました。私は支援学校の高等部ですが、一般校での状況をお聞きでき、よかったです。
・個別の教育支援計画、個別の指導計画について、何となく知識は持っていましたが、今回の講演を聞かせていただき、記入の仕方、会議の持ち方など具体的で分かりやすく大変参考になりました。２学期からさっそく実践できるよう、今回の資料をもう一度読み直し、振り返りをしたいです。ありがとうございました。
・とてもわかりやすく良かったです。ホワイトボードの活用、さっそく実践したいと思います。あと、高校の支援体制についても十分理解できました。
・自尊感情がキーワードになっていました。やはり、どの子どもにも自尊感情が大切だと再確認できました。
・話の内容がとても分かりやすく聞きやすかったです。ワークの時間があって実際にできて勉強になりました。
・パワーポイントがとてもわかりやすかった。ａ、Ｐ、Ｃ、Ａ会議を学校で実践していけると、すごく子どもたちに寄り添えると思った。時間など学校全体でどう行っていくかアクションを起こしていきたい。
・高等学校の様子を聴く機会があまりないので、貴重な発表でした。ありがとうございました。支援学校の先生の企画もたいへん具体的でわかりやすかったです。
・個別の教育支援計画、個別の指導計画を立てる具体的な方法がよく分かりました。
・日常、市内の研修では、小中間の交流になるが、高校や支援学校の話を聞くことができ参考になった。
・ホワイトボードを使ったケース会議が参考になりました。どのように書けばよいのか、イメージがわきました。
・今日の話を参考にケース会議に職員を巻き込んでいきたいです。

第５分科会　　学校におけるＩＣＴの活用

・若い教員に目を向けた話が、とてもためになった。
・具体的な事例が多く、とても役に立った。
・授業で「どう使うか」生徒に「どう使えばコミュニケーションを取れるか」など、色々勉強になった。
・ＩＣＴはツールの一つであり、生徒にあったように使わないといけないことが良く分かった。
・次の指導要領改訂の時には、ＩＣＴの導入が奨励されると感じた。今は、パソコンの学習アプリ（Ｙａｈｏｏキッズなど）だけを使っていて、こういう学習ソフトを使っていていいのかと、いつも迷っている。ＩＣＴ支援により底面積を広げるためには、（坂井先生談）教師の技術力（発想力）を磨いていかなければと痛感した。本日の資料「発達障害教育情報センター」にもアクセスして、情報収集し勉強していきたい。
・ＩＣＴを使うことが目的ではなく、子供に身につけさせたい目標があって、それを達成するためのツールとしてＩＣＴの活用を考えていかなければならないということに気づいた。
・支援のあり方や具体的な方法について、新しい見方を教えてもらった。
・ＩＣＴ活用ということで、いかにしてＩＣＴを現場で使っていくかという話だけでなく、子どもの視点を重視した話もたくさん聞け、今後の指導に役立てそうで良かった。
・ＩＣＴ機器を何のために使うか、その意味を自分に問い直すきっかけを与えてもらった。
・ＩＣＴ機器をうまく使えば、可能性がたくさん広がるなぁと思う。でも、使うことが目的でなく「何のために使うか」「これを使えば、この子がどんなことができるのか」「どんな力を伸ばせるのか」など使う教師がしっかり考えなければいけないという話が印象に残っている。私も使うことが目的になりがちになってしまうので、気をつけたい。「あっちの世界」という言葉があったが、私は「あっちの世界」を推測できているかと、再度考えさせられた。
・３人の講師の方のお話は、話題がそれぞれ違っていたが、ＩＣＴ活用の問題が持つ側面をそれぞれ言い表していたと思う。
・午前の話と午後からの話が、とても関連していて良かった。
・朝の講演、昼からの分科会ともに長期的な支援、卒業後を見越した支援の大切さがキーワードになっていたと思う。「キャリア教育」にしても「ＩＣＴの活用」についても、その言葉を狭義に捉えるのではなく、もっと広くそして繋がりを持った言葉として捉えなければならないと感じた。分科会は３時間と長時間でしたが、とても短く感じた。
・ＩＣＴを使うことで、多くの支援が可能になることが分かった。

・私はどちらかというとＩＣＴの活用とは、どういう方法があるんだろうという立場だったが、できる範囲でアイデアとともに取り入れていく、一つのツールとして捉えておくことで良いということを、今日は習得した。
・ＩＣＴを活用することが、目的になってしまってはならないということが強く印象に残った。子どもの理解があったうえでのＩＣＴ活用なのだということを再認識できた。
・ＩＣＴについて色々な角度からの考えを聞けたことが良かった。できれば、具体的な活用例をもう少し聞ける時間があればありがたかった。
・１０年後ということだったのですが、今使っていること、これからどう使えるかなど、具体的な話があれば良かった。竹島先生の保護者としてのお話は、参考になった。

第６分科会　特別支援教育におけるキャリア教育

・作業学習と職業教育の違い
何となくしか分かっていませんでしたが、基礎基本を身につける学習と職業に必要な力を身につけることと学校で行っている内容を振り返りたいと思った。
・キャリア（教育）の定義として、永松教授の説明にあった、キャリア教育を広義～最狭義で考えると分かりやすかった。
・亀平先生のお話を伺って、午前の全体会でも言われていた「得した感じがする」と同感でした。障がいのある人のことだけでなく、誰にでも通じる必要なことが確認できたと思います。夏休みを終えたら、今までとは少し違った言葉かけを生徒にしてみようと楽しみになってきました。本日はありがとうございました。
・全体会とリンクした内容であり、興味深く聞かせて頂きました。就労に向けて、我々教師がどのように気づき、その手順などを理解し、伝えていけるかという力がとても大切であるということを教えて頂きました。
・亀平先生の講演内容はとてもわかりやすく「そうか～」とうなずけるところがたくさんありました。とても参考になりました。
・亀平校長先生のお話から、特別支援学校の職業教育のあり方が、いかに甘く考えているか！が認識できました。内部にどっぷりつかっていると見えていなかった、見ようとしなかった部分を気づかせていただきました。持ち帰って早速出来るところから変えていきたいと思えました。ありがとうございました。

・不登校児童の支援加配教員として仕事をしています。学校に通っていない生徒にとって将来、自分の力で生活していくためには、今、何をすればいいのか…。日々の活動がキャリア教育の視点に立ったものであるようプログラムするのが、私の課題、仕事だと思っています。その中で、自立に求められる５つの基本的な力「健康管理」「生活習慣」「コミュニケーション力」「対人関係、ルール」「自分の好みを知り、力をつける」は、今後いつも意識して、取り組みの中でチェックしていきたいと思いました。
・「小・中・高等学校の職業観・勤労観を育むプログラム」は抽象的で何をどうしたら…と思いましたが、特総研の資料は、具体的で取り入れやすいと思いました。「社会的コンピテンス」は「？？？」でしたが、まわりがどのように対応するか、他者理解の学習プログラムや違いを認める教育の重要性を感じました。
・亀平先生のお話に子ども自身が「気づく」機会がないと自発的な活動は望めない、というのがありました「その通りだ」と心の中で深く頷いてはいましたが、子どもたちに「気づかせる」ような取り組みを自分自身ができているのかと考えました。
子どもに「気づき」が生まれるようなしかけをこちら側でできるよう、これからも考えていきたいと思います。
・支援学校におけるキャリア教育を考えるよい機会となりました。

※参加された方へ
アンケートに貴重なご意見ありがとうございました

基本的に書かれた文章そのままで転載しましたが、語句など一部の表現を変えさせていただいている場合もあります

大阪府支援教育研究会　６０周年記念研究大会

参加された方のアンケートから

この研修会の運営全体について

（参加申し込み、事前準備、当日運営、実施日、その他）

多くの方から、よい大会でした、運営お疲れ様、という言葉をいただきました。ありがとうございました。しかし、至らない点や反省すべき点が少なくなかったのも事実です。さまざまなご意見ありがとうございました。今後の運営に活かしていきます。

ＨＰからのメールでの申し込みについて多くの方から良い評価をいただきました。

・ホームページで参加人数を確かめることができてよかった。
・メールでの参加申し込み、確認のメールなどスムーズで良かった。
・メールでの申し込みが迅速な対応で良かった。申込み数も HP でわかり、利用しやすい。
・e メールで申し込みができるようになっていて、便利であった。

しかし、ＦＡＸ申し込みもできるようにしてほしいという意見もありました。また、申し込みされた方すべてに「参加受付確定」のメールをお送りしたのですが、少し遅れてしまった例、送信ができなかった例もあり、何人かの方にはご心配をおかけしました。参加受付確定についての説明文の書き方・内容へのご指摘もいただきました。今後の申し込み受付の改善に活かしていきます。

・メールの申し込みはやりやすくてよかったのですが、１次案内から申し込みできる期間まで時差があり、うっかり申し込みを忘れないかハラハラしました。
・研修会への参加申し込みした後の、参加の確定がわかりにくかったです。
・自動送信でメールを頂いてから、「参加可否は後ほど…」文が気になっていました。全く何も来ないので！
・申し込み後の決定メールが来なかったので不安でした。
・参加申し込みのメールが少しわかりづらかったです。「参加してください」の下に「このメールは確定ではありません」と書いていたのでどちらかわかりませんでした。
・個人のアドレスがなく、インターネットでの申し込みが困難でした。まだネットが使えない人のために、配慮を続けてください。

会場の空調について、ご意見が多くありました。全体会会場は冷房が効きすぎて寒かった。逆に分科会の会場の中に暑すぎる部屋があったとの声がありました。全体会会場は資料を見るには照明が暗すぎたという声もありました。分科会の会場配置の案内が少し分かりにくかったという声、時間設定に工夫が必要というような声もありました。

・場内が（上映の関係もあると思うが）手元が暗く、資料が十分見られないのが残念。
・分科会３に参加させていただきましたが、３つも発表がありました。各テーマ後の休憩タイムの必要性を感じました。または、２つ程度の発表の方が集中力が維持できたかもしれません。
・午後からの分科会、１つ５０分であれば、２つにしてはどうでしょうか？
やはり休憩時間だけはしっかり確保してほしいです。

案内文の表記内容へのご批判もありました。会場へのアクセスについてですが、谷町九丁目駅１０番出口という表現がよくないとのご指摘を受けました。谷町九丁目駅から地下連絡通路を通り、近鉄大阪上本町駅１０番・１４番出口からというのが正確な表現です。全体会開始時刻と受付開始時刻の差を明記すべきという声もありました。

午前のみ・午後のみの参加も可能ということが分かりくいという声もありました。

資料に子どもたちの写真があることについての質問もありましたが、これは講師の方と確認したうえでのことであります。

現在、大支援研の取り組みは、主にインターネットおよびニュース配信でお知らせさせていただいております。しかし、それだけでは不十分、案内文の配布を各支部・各校で行って、もっと多くの人の目に触れるようにしてほしいという声もありました。

・とても良い内容なので、できればもっと広く参加を呼び掛けても良いと思う。大阪府立以外は難しいのか？
・案内冊子が学校に届いておらず、インターネットで申し込みました。
・スムーズな運営でよかったです。ただ、これだけ素敵な研究会ですが、現場にあまり広報されていませんでした。（ポスターやチラシなども見かけなかったので）もっと広く広報されてもいいかもしれないと思いました。

最後に、今回の大会で各支部から来られた役員・大会要員の方には本当にお世話になりましたことを、あらためてお礼申し上げます。

・午前の受付が混雑しなくて、スムーズでよかったです。準備が大変だったと思います。お疲れさまでした。ありがとうございました。
・大規模な大会になるほど事務局の方々の苦労は増大すると思います。本当にご苦労様です。このご苦労があるからこそ大会が実行できるのだと思います。

これから、どのような研修会や講演会を行えばよいでしょうか

多くの様々なご意見、ありがとうございました。今後、活かしていけるようつとめます。とくに多くの方からいただいた意見は次のようなものです。

具体的な実践についての報告　アイデア・ノウハウを知りたい。
花熊先生の話をもっと聞きたい。
夏季休業中に研修を行ってほしい。

その他、おもなご意見をしめします。

・各種テストについて、Ｋ－ＡＢＣ、ＷＩＳＣ－Ⅳなどを利用した支援の研修。
・支援学級の日常の教材の紹介。学習面で効果のあった、自作プリント等（事例紹介とお勧めの指導用教材について）
・インクルーシブ教育について、一人一人の子どもを理解することの大切さについて。
・各学校で、相談窓口の取り組みを知らせてほしい。（窓口があることを知らせる方法・活動内容・保護者との関わり・先生と関わりなど）
・療育や訓練についてなど、重度の子ども達の支援を学べるようなものがあれば有り難いです。子どもの行動（重度の子どもで、自傷行為がある、発語なし）にある、心理的背景が知りたい。
・実在するアスペルガー、その他の障がいのある方の話。
・パネルディスカッションもたまには良いのではないでしょうか。こんなことを悩んでいますや、これからの支援教育について、事前に聞きたいことを把握できればいいですね。
・授業のユニバーサルデザインについて
・授業、環境設定、ＩＣＴ機器の最新の情報について
・ＩＣＴ関連でも実践的な取り組みなど、いくつも取り上げてほしい。
・いろんな企業や施設を見学させて頂ければありがたいです。
・インクルーシブ教育の理念、現場への移行等
・「発達障がい」の人たちが、学校生活で不適応をおこし、不登校状況になるケースは、結構な割合になると思います。発達障がいとはいかずとも不登校の児童生徒が、同じような困難さを持ち、苦しい状況にあると感じます。不登校状態になってしまったときのアプローチや具体的な支援プログラムなど学習できたら…と思います。
・遊びの中での学びという課題で考えを深めてみたい。
・支援学級在籍児童のことをどうクラスの他の子たちに伝えていけばよいか、今取り組みかけているところです。具体例や成功例を教えてほしい。

・午前の講演で社会的スキルが大切だと聞きましたが、SST など行っても、その時は正しい行動ができるのに実際場面になるとできないので難しいです。具体的に実生活でできるようになる指導のポイントや事例など聞きたいです。
・中学校のあとの進路について、それに向けて小中で取り組むべきことは。
・学校のみの支援では限界があるので、どういう外部機関と、どのようにつながっていけるかを、具体的に知りたいし、小・中・高～と縦のつながりの中での支援方法のあり方も今後の課題であると思っている。
・普段聴けない（学習できにくい）専門家の方の講演や実践報告を。
・重度障がい児が地域の小学校に入学してくるが、教師の人数が保障されず、親からの批判や、他の軽度の障がい児への対応が課題となる現実がある。どう解決するか。
・チーム支援の模擬講座
・ペアトレーニング講座
・より深く連続講座で
・「ユニバーサルデザインの授業つくり」「ペアレントトレーニング、ティーチャーズトレーニング」「ピアサポート」「認知行動療法（怒りのコントロールの仕方）」
・反抗挑戦性障がいや行動障がいのある人への対応
・保護者支援の観点からのテーマ
・教師集団、学年集団のまとめ方の研修会。学校や学年集団が安定していると、学級経営ができ、ニーズに応えることができることにつながる。
・当事者さんが気持ちや思いを表出し、互いに支援者とのコミュニケーションができ、“居心地良く生活できる”を目指し、グッズを開発、それを使うことで楽に暮らせるために紹介活動に奔走されている兵庫県篠山市（株）「おめめどう」奥平綾子代表取締役を是非。
・防災教育に関する分科会などいかがでしょうか。
・ＩＣＴを利用した授業などについて研修や講演をしてほしい。特に ipad など家電量販店で購入できるものを利用した授業・支援など、８月中旬の研修にいけないので繰り返し開演してほしい。
・支援学級の学級経営。学校、学年と支援学級の連携の在り方。
・他府県のよい空気を持って実践している事例を持った先生方の話を入れてください。
・全体会最後のスライドで示された４つの領域の研修との連携や協働、就学前や乳幼児健診エリアとのより具体的な取り組みをお願いしたい。研究会同士がコラボした研修会の開催。
・文科省の支援教育担当の方の話。全国で特色ある取り組み等知りたい。
・支援学校、支援学級担任の教師だけでなく、通常学級の担任や担任外、管理職なども花熊先生のようなわかりやすいお話を聴いていただき、研修されるとよいと思います。
・アセスメント研修、事例研修

・大阪府全体として府のネットワークなどの研修会をしてほしい。
・支援教育を受けた児童生徒がその後社会に出て実際にどうなっているのかなど、本人を通して知りたいです。
・キャリア教育の推進について、さらに的を絞った研修をしてほしい。
・今回のような現場も熟知された大学の先生の講演は非常に勉強になります。専門的見解も参考になりますし、何より講義がとても上手で分かりやすくて、その点も尊敬するところです。支援教育を研究されている先生の講演をぜひ続けていただきたいです。
・キャリア教育、ＳＳＴなど社会性を育てることのヒントや具体的な技（ミニゲームなど）が知りたいです。
・教材、教具の開発。実践紹介。ユニバーサルデザインの授業。
・ＬＤの子どもに英語をどう教えていくべきか、英語教育に特化した実践例の紹介。
・経験年数の浅い教職員が明日使える手立てのみでなく、本日のご講演のように取り組みを打つにあたって“何を大事にするのか”“どういう視点を大事にするのか”を学べる研修があるとよいのではないかと思います。
・福祉ネットワークの構築といった視点で、作業所・授産施設・役所の福祉課等、児童・生徒を長期的・包括的に見ている方の話を聞きたい。
・発達検査の見方や有効な活用の仕方。
・見立て、特性理解、具体的支援などにつながる理論的な話や、学校の実践報告
・支援グッズについての展示
・保護者支援の観点からのテーマ（保護者にも聴いてもらいたい）
・最新の支援方法や色々なアイデア
・教育と福祉の連携

※参加された方へ
アンケートに貴重なご意見ありがとうございました

基本的に書かれた文章そのままで転載しましたが、語句など一部の表現を変えさせていただいている場合もあります

2012 年度　行事部主催　施設見学会報告≪株式会社関西インフライトケイタリング≫

平成 24 年 8 月 21 日(火)9：30～12：00

「株式会社関西インフライトケイタリング」は、ロイヤルホールディングスグループ会社の一員として、関西国際空港開港時より現在まで、機内食の調製などの業務を中心に経営されている企業です。

会社概要等の説明の後、実際に職場の様子を見学させて頂き、その後質疑応答の時間が持たれました。

１．会社概要

設立：昭和 63 年(1988 年)8 月 30 日
従業員：170 名（内 7 名が障がい者、約 20 名が外国人スタッフ）
委託先社員：170 名
主な業務内容：1. 航空機内食の調製・販売・搭載、2. 食品(弁当など)の販売、3. 保税倉庫業、4. 空港ターミナルビルレストランの経営　など
顧客エアライン：26 社
受賞・認定履歴等：UA QualityFirst Award 2nd semi annual 2011 はじめエアライン受賞多数。大阪版食の安全安心認証制度第 1 号施設。日本国内の機内食会社で ISO22000 認証取得第 1 号施設。マレーシア航空ハラル規格認証。食品衛生有料施設厚生労働大臣賞など多数受賞。
HP: http://www.kicfinefood.com/index.html

２．障がい者の雇用について

現在は佐野支援学校との連携を密にしており、これまでに 8 名の障がい者を受け入れています。1 年間のスケジュールとしては、5 月頃に受入枠の確認、6 月と 10 月に約 2 週間の実習期間があり、それぞれの実習期間において、実習生の基礎能力・技能の確認などを行っているそうです。2007 年から障がい者の採用が始まり、現在までに 8 名が採用されています。実習時には、2 週間の実習スケジュールを渡し、予定の見通しを立てやすくしています。また、実習の際にレポートをつけ、実習生の作業ごとの適性を見ているようです。その人の能力が会社の仕事に適うかどうかではなく、その人の能力に合った仕事が会社にあるかどうかを判断するのだそうです。また、学校から事前に情報をもらい、実習時の適性判断を行いやすくしたり、色々な作業をしてもらうことで、隠れた能力を掘り起こす取り組みをしたりするなど、積極的に努めています。

そういった取り組みの中で、学校でつけてほしい力として、

・きちんと大きな声で挨拶ができる。
・意思表示ができる。
・時間、手順、ルールなど決めたことを守る。
・責任感
・整理整頓
・持続力
・ある程度のコミュニケーション力

をあげられていました。

さらに、障がい者を採用することについて、その良さを以下のように述べられました。

・健常者以上の能力を発揮する。
　その人が持っている能力を最大限発揮することで、単純作業の繰り返しなどにおいては、健常者よりも早く・正確に作業をこなすことが出来る。
・全体の生産性向上
　障がい者の視点でわかりやすくシンプルに作業工程の見直しや組み替え・改善をすることで、従前よりも全体の生産性が向上する。また、指導する側も人を教える力がつく。

・企業の社会的責任（CSR）を果たす
2012 年 1 月 1 日現在の雇用率は 8 名　3.0%、法定(1.8%)を大きく上回っている。（2012 年 8 月 21 日現在で雇用は 7 名とのこと）

2011 年には、大阪府障がい者就労サポートカンパニーに登録され、大阪府教育委員会より、「支援教育サポート企業表彰」を受賞されています。

３．施設見学

施設見学の前に、白衣・帽子・マスク・靴カバーなどを装着し、衛生環境を損なわない状態になってから、3 班に分かれて施設内を見学し、説明を受けました。食器類の仕分け、洗浄などの業務の様子を見る中で、障がい者の方の食器類の仕分けの手際の良さと、黙々と続けている姿勢に感心しました。

４．質疑応答

Q．障がい者の従業員の賃金は？
A．法に定める最低賃金は守っています。

Q．障がい者の雇用は、その人に何もなければ定年まで従事できるのか？
A．そう考えています。まだ 7 年ほどしか経っておらず、結婚や出産などの事態に直面していないので、具体例をあげることはできませんが…。

Q．障がい者の方の通勤については？
A．皆さん公共交通機関を利用しています。はじめは保護者の方と一緒に練習している方もいました。

Q．採用枠に関して、その枠にどれほどの人数が集まるのか？
A．採用については、支援学校と相談を重ねて、面接などを通して調整しています。

Q．障がい者の雇用や支援学校との連携をするに至ったいきさつを教えてください。
A．初めは、障がいを持った子の保護者の方がこちらに勤めていたことがきっかけでした。

５．お礼の挨拶　大阪府支援教育研究会　有山暁雄先生

以上　大阪府支援教育研究会　行事部

～参加者の感想～（一部抜粋）

・障がいのある方への支援によって、仕事の効率や全体の生産性が向上し、教える側の人間力の向上につながったというお話が印象的でした。また、その人の能力に合った仕事が会社にあるかどうかの視点で雇用されていることも印象的でした。
・会社の型に人を入れ込むというのではなく、その人にできることを探して、能力を開発するという考え方をされている会社で、すばらしい実践をされているところを見学できてよかったです。あの地道な作業を食の安全、衛生、サービスといった会社の信頼や質の向上をになう部門で黙々と働いていらっしゃる方々の姿に忍耐を感じました。多くの企業が障がい者に対してできることを増やして門戸を開いてほしいと思います。学校での力も磨いていきたいと思います。
・「その人の得手、不得手を見極めて仕事をしてもらう」と聞き、このように考え、採用してくれる会社がもっと増えて、障がい者の方が活躍できる場が増えればいいなと思いました。「学校でつけてほしい力」の話も印象に残りました。ルールを守る等、小さいころから指導し、身につけさせてあげなければと思いました。
・説明の中の「学校でつけてほしい力」というのは、生活していく中でも基本となることなので、小学校生活や家庭生活の中で身に付けられるようにしていかないとと改めて思いました。施設内を見学させていただき、標語や図、写真等、シンプルで視覚に入りやすい掲示があり、参考にしたいと思いました。

関西国際大学子育て支援センター主催研修講座

「自閉症の新しいアセスメント法と発達障害児の地域支援」

関西国際大学子育て支援センター長　　藤 田 継 道

障害の早期発見・早期教育の重要性が叫ばれ，医学や発達心理学等が中心となった学際的な研究が進められ、飛躍的な成果が得られています。生まれてきたすべての赤ちゃんについて誕生直後から発達を追跡していき，発達障害の早期発見と早期療育を行って，多くの発達研究者から注目されている「糸島プロジェクト」のリーダーである、九州大学名誉教授大神英裕先生から、発達障害の早期発見と早期教育に関する最先端の研究成果と地域支援の方法についてご講義いただきます。

さらに、自閉症の場合，自閉症であるのかどうか，どういう特徴の自閉症であるのか，自閉症の重篤度はどの程度なのかの診断・アセスメントが的確に行われ，指導によってどこまで伸びたかを明らかにしていくこと（エビデンス・ベイスト・アプローチ）が求められる時代になってきました。こうした流れの中で，自閉症の治療や教育には，科学的根拠のある診断・アセスメントが実施されていなければならないことが国際的に規定され始め，そのための直接的な観察法である ADOS (Autism Diagnostic Observation Schedule) が用いられるようになっています。ADOS を正しく理解し実施するためには専門的な訓練を受ける必要があり、研究などで使用するにはさらにライセンス（資格）をとらなくてはなりません。日本で数人しか取得していないリサーチライセンスをお持ちの大阪大学大学院連合小児発達学研究科助教の実藤和佳子先生には、ADOS を中心とした自閉症のアセスメントについてご講義いただきます。

発達障害のある子どもの教育・福祉・医療・保健のお仕事に携わっている方々のご参加をお待ちしています。

＜主　催＞：関西国際大学子育て支援センター
＜後　援＞：兵庫県・神戸市・尼崎市・西宮市・伊丹市・宝塚市の教育委員会（予定）
＜日　時＞：平成２４年１１月２４日（土）１３時―１７時
＜場　所＞：関西国際大学　３階　３０１KUIS ホール（裏面の地図をご参照ください）

＜日　程＞

12:00	13:00	14:40	14:55	16:50	17:00
受付	『発達障害児の地域支援』 大神　英裕　先生	休憩	『自閉症のアセスメント―ADOS を中心に』　実藤　和佳子　先生	質疑応答	

＜講師紹介とご担当講義＞

大神英裕先生『発達障害児の地域支援』 九州大学名誉教授。糸島プロジェクトのリーダー。「発達障害の早期支援」の著者。「ジョイントアテンション」の訳者。心理リハビリテイション研究所代表。

実藤和佳子先生『自閉症のアセスメント―ADOS を中心に』

大阪大学大学院連合小児発達学研究科助教。我が国では数少ない ADOS のリサーチライセンス（資格）を取得しているお一人です。

＜参加費用＞：５，０００円（当日受付でお支払いください）
＜申し込み方法＞：「ファックス」または「メイル」に以下の必要事項を書いてお申し込みください。

◎申し込み先＝関西国際大学　教育推進課　Fax ： 06-6496-4321,　E-mail ： exc@kuins.ac.jp

◎記入 事 項= ①お名前、②ご所属（ご職業）、③電話とファックス番号、④〒と住所、⑤メイル・アドレス

＜締め切り＞１１月２１日(水)午後１０時

＜受付完了のご連絡＞「ファックス」または「メイル」で「受付票」をお送りします。24 日当日この受付票を持参し、受付でご提示ください。**問い合わせ（月~木）：子育て支援センター＝０６―６４９６―４３３９**

金･土･日：子育て支援センター長=０９０－１９１０－５５２９

申込書（自閉症の新しいｱｾｽﾒﾝﾄ法と発達障害児の地域支援）

関西国際大学

教育推進課宛

FAX. 06-6496-4321

E-mail: exc@kuins.ac.jp

1．受講者名（ふりがな）	所属（職業）	電話 ファックス	〒　　住所 e-メール
2．受講者名（ふりがな）	所属（職業）	電話 ファックス	〒　　住所 e-メール
3．受講者名（ふりがな）	所属（職業）	電話 ファックス	〒　　住所 e-メール
4．受講者名（ふりがな）	所属（職業）	電話 ファックス	〒　　住所 e-メール

問い合わせ先：月～木＝関西国際大学子育て支援センター＝Tel 06-6496-4339

金・土・日＝子育て支援センター長＝（携帯）090-1910-5529